

第19回 日本慢性看護学会 学術集会 交流集会のご報告

慢性疾患看護専門看護師研究会の会員が企画、担当をし、

第19回 日本慢性看護学会 学術集会 交流集会に参加しました。

開催日時:2025年 9月 7日(土) 13:30~14:40

場 所:岩手県盛岡市 いわて県民情報交流センターイーナ

テ マ:『自分の死期を悟った慢性疾患 患者への看護を考える
～慢性心不全患者の事例を通して～』

交流集会の内容:企画担当者から事例紹介の後、事例の患者さん



自身が死期を悟り恐怖を抱いていることを看護師が捉えたポイントについてや、予後予測が困難である慢性疾患患者が死期を悟っていると気づいた時にどのような看護が大切かについて、企画者が各グループのファシリテーターとなり、参加者の皆様とグループディスカッションを行いました。

参加者数:29名 ディスカッション参加者 29名

【アンケート結果より】



・眠れないと言う言葉の意味が変化していくことや患者の訴えの裏にある患者の本音を聞き、寄り添い伴走するということについて考えた。難しいテーマだし、看護師それぞれに価値観

も違うから、みんなで話せてよかったです。貴重な機会を頂きありがとうございました、グループメンバーと積極的な意見交換ができて良かったです。事例提供の仕方や進め方がとても良かったです。グループで話も弾んで楽しかったし学びになりました。という意見もありましたが、質問の意図が分かりにくくて困りましたや事例で何を話し合うか、もう少し吟味されたら良かったなと思いますなどの改善点についてのご意見もいただきました。

私たちは、交流集会の企画から発表を通して、患者さんの経過の転機、場面が移り変わる中で、看護師が夢中になってケアをしていて、見えなくなっている部分もあったことに気がつき、その場面場面で患者をトータルに捉えて看護につなげていくということを学ぶことができました。

また、患者さんの言葉そのものを受けとめて、「寝かせてあげたい」と交替で背中をさすり続けた看護師が目の前の苦しんでいる患者さんから離れず、そばにいること、同じ時間を過ごしたことには意味はあったのだということにも気づくことができました。

病いとともに生きてきた患者さんを知っている看護師として、今、死が直前に迫っていることを悟った患者さんに対して、その人らしい生活というのがどうしたら継続できるかという視点が重要ではないかと思っています。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

＜交流集会 企画・発表者＞

秋吉 美典 市立長浜病院

伊山 美穂 上野原市立病院

鈴木健太郎 新潟市民病院

藤川 真弓 平塚共済病院

吉田 美樹 JCHO 滋賀病院

